

木 下 夕 爾

— その人と作品 —

第一章 GENIUS LOCI

西 原 茂

GENIUS LOCI ということばを、わたしは「岩波英和辞典」で知った。が、今は江藤淳が「日本の詩はどこにあるか」(一九五八年四月号・短歌研究)のなかで「詩は、いわば genius loci によっては生まれませ」と結婚する。」などと言っている用例に従いたいと思う。

すでに常識とされていることだが、「小宮豊隆氏の『夏目漱石』は……漱石評伝の決定版であって、その精緻な考証は尊敬に値するが、いささか迷惑なのは氏が、このおびただしい貴重な事実を、『則天去私』の悟達を導き出すために、整然と合理的に配列しようとしたことである。伝記作者達が共通に感じるこの誘惑に、小宮氏もまたおちいつているので、これを克服し得たものの代表的な例は、『ジョンソン伝』を書いたボズウェルという男の場合である。グレイか誰かに悪口をいわれているこの鈍重なスコットランド人は、何の色気も出さずに、愚直にジョンソンの言行を記録していたために、稀に見る生気撥刺たる肖像を描き得たのであって、事実の価値というものは、それが無差別に雑然とほり出されている所にかある

ものではない。この重大なことを知っていたボズウェルは期せずして評伝に可能な唯一の方法を身につけていたということになる。」(江藤淳「夏目漱石」の第一部「漱石の位置について」の第一章「漱石神話と『則天去私』」による)という警告は、いまわたしにとって重要である。

とは思いますが、今のところボズウェルになり得る自信はわたしに無い。悪いことに、わたしは昔、ある夏休暇、図書館から「ジョンソン伝」を借り出しながら、読み通せなかった記憶があるのだ。とにかく一応、GENIUS LOCI の章として筆を進めよう。なるべく愚直に、なるべく雑然と。

木下夕爾(きのした・ゆうじ)が、その名を詩壇に現わしたのは、一九三九(昭和14)年、その第一詩集「田舎の食卓」で第6回文芸汎論(ぶんげいはんろん)詩集賞を貰った時である。そのことは章を改めて触れる。

一九四七(昭和22)年3月7日、文部省が編集発行した教科書

「中等国語」の二の(1)に「早春」の一篇が「木下夕爾の作による」として掲載された。夕爾には、同じ題名の詩が他にもあるので、ま  
ちがいを防ぐために、教科書に載った「早春」の全篇をまず掲げよ  
う。

## 早 春

もっと明るく、

大きく飛べよみそさざい。

地に沿うて鳴いて行く、

おくびょうなみそさざい。

つながれた子うしの目に、

うめの花が映っている。

手を触れてみる短い角に、

かすかなぬくみが、

遠くから来るもののおしおとが。

五寸ばかりの麦の上、

水のかれた水車小屋のほとり、

もっと明るく、

大きく飛べよみそさざい。

この詩は、前記「田舎の食卓」でデビューした詩人の作品として  
は生彩を欠くように思うひとも多かるうが、いろいろの意味で、夕  
爾の詩としてまず取りあげざるを得まいとわたしは思う。

この「早春」は夕爾の全作品のうちでいちばん多勢の目に触れた  
詩である。

わたしの回想になるが、日本が戦争に負け、被占領国になってい  
た頃のことである。「進駐軍の命により」ということで、ページの  
いたるところ黒々と墨汁を塗って削除され、手にするのも異様を感  
じのする教科書を使っていた中学校(旧制)国語科教師にとって、  
現場の実感として、ホッとする日がやって来た。

一九四七(昭和22)年2月25日、閣議決定で、義務教育年限  
延長による「新制中学校」があわただしく発足。戦後の教育の新し  
いスタートに文部省が教科書を用意した。元来、義務教育の学校の  
教科書は文部省が作ることにしていたのだから、それは当然のこ  
とと受け取られた。今日とは事情が違うので念のために書き添えて  
おく。さてその二年生用「中等国語」の巻頭に、進級早々の生徒の  
ための新しい本の序詩のようにこの「早春」が掲げられたのである。  
虚脱していた中学国語教師が、教育への意欲と生気を取りもどした  
のはこの時である。「国破れて山河あり」と言うことはその頃ひ  
とびとの口にはのぼったが、「国破れて新教育生まる」の実感を教師  
が味わうことが出来たのはこの「早春」の教科書を手にした時であ  
った。こうした実感については、夕爾死去後、福山市公会堂で行な  
われた追悼式で「思い出を語る」人のひとりとして登壇した近郷加  
茂町の三島茂夫氏も開口一番それを語ったことである。

煩をいとわず記して置こう。その時、県立の旧制中学校へ入学試



ある。西原註)、木下君の兄さんが、夕爾を詩人として仕事を続けさせるために東京へ出そうと考へ、その仕度をして夕爾に東京へ出ないかと言いますと、木下君はいやだと断つたそうです。パッとジャーナリズムのフットライトをあげることを恐れたんじゃないかというように氣もします。」

井伏氏の觀察は正しいと思う。夕爾を紹介することばとして適切だと思ふ。そしてわたしはさらに夕爾研究の資料として次のことを告げたい。

彼は、一九四八年二月二十八日午後六時三十分、そのころ広島県尾道にあったNHKの放送局から、「備後地方の詩文学の動き」というラジオ放送を行なった。

その時の原稿が、当時広島県世羅郡甲山町にいた夕爾の実兄木下卓司編集発行になる俳誌「斧」第一巻・第二号(昭和23年10月5日発行)に掲載されている。その中に次のようなことばがある。

「ご承知のように終戦後のわが国には、東京文化がそのまま日本文化であるという風な今までのあやまちを是正するために、各地方に活潑な文化運動が展開されており、それらは徐徐に各地方の特異な風土につちかわれた実を結ぶことでありましよう。そうして詩のような純粋な文学こそ、その一翼を荷なり、最も多くの適応性をもっていると考えられます。

フランスの最も偉大な詩人のひとりであったフランシス・ジャムはピレネー山脈の麓、オルテスという小さな町に一生を送っており、パリへ出てゆくことすらめったにありませんでした。ジャムはそこでその土地の風物——森や水車小屋や山羊や蜜蜂やそのほかあらゆる自然を限りない愛情をこめてうたいつづけました。素

朴で新鮮な彼の詩から、われわれは南フランスの明るい風物を生き生きと汲みとることが出来ます。

文芸批評家テエヌは、文学は民族・時代・土地の三つから成るといつておりますが、文学だけでなく人間の性格さえもその風土の影響を脱することは出来ないでしよう。このことは石川啄木や俳人一茶の場合を考えてみてもよくわかりますし、近くは山口県から革命的な詩人児玉花外が生まれ、山陰のさびしい海鳴りが伊良子清白の詩魂をゆすぶって詩集「孔雀船」をなさしめたように、そのほか枚挙にいとまないほどであります。交通機関が発達して文化の交流のはげしい今日では、風土と文化とを、テエヌのいう古代文化の場合と同じように一概に考えることは不当であるかも知れませんが、いつの時代になりましても風土の影響の厳然たる事実を否定することも出来ません。こういう風土のうえから考えますと、上州の激しい空っ風の中から生まれた萩原朔太郎や、広ぼう一万五千数百年キロに及ぶ岩手県の大平野にはぐくまれた宮沢賢治のような詩人は、わが備後地方のおだやかな土地がらには育つ可能性がすくないかも知れません。……(広島県が生んだ)大木惇夫氏があくまで優美な抒情詩人であることを思い合わせると、まことに興味ふかいものがあります。しかし、同時にまた薄田泣菫や北原白秋のようないんらんたる色彩の豊富な詩人は、北国の陰うつな風景のなかからは生まれることがすくないであります。

われわれの地方からは、わが地方独特の風格をもった詩人があらわれてくることを待望するゆえんであります。瀬戸内海に臨んでいゝる国々は、ちょうど地中海に抱かれて美しい文化をかたちづつた国々のそれに似ています。北国の風土の持っている激しさやきびし

さをのぞむことは出来ないかも知れませんが、ラテン的な明るさと均整を持ったものが生まれるであろうと思われます。しかもそれは、フランス・ジャムが南フランスの風物を愛してやまなかつたように、また、俳人一茶がおのれを容れてくれなかつた故郷を愛慕してやまなかつたように、その風土に対する深い愛情から発しななければなりません。……」

NHK放送の、おそらくこれが最初だったろう、多少よそ行き顔ではあるが、「いつの時代になりましたも風土の影響の厳然たる事実を否定することができません」などと言うところに、詩の実作者の苦悶のあげくの肉声を聞く思いがする。「われわれの地方からは、わが地方独特の風格をもった詩人があらわれてくることを待望するゆえんであります。」ということばも、概念としてはありふれたことで誰にでも口に出せることが容易である。木下夕爾の口から出た時、このことばが重みを持つのは「風格」をもつその持ち方の大切さを彼が解っていたからである。「地方独特の風格」への道はきびしく淋しい道であつたろう。彼ほどの詩才をもってしても、この道はきびしく淋しい道に見えただに違いない。「われわれの地方からは、わが地方独特の風格をもった詩人があらわれてくることを待望する」と言ったのは、彼が正直にそう思っていたのだとわたしは受け取りたい。

わたしがここで語りたことをまだ語り尽してはいないが、木下夕爾をして木下夕爾たらしめた genius loci によってはられた自覚にかかわりを持つと思われる、東京へ出なかつた点を見るために「東京行」を引用せねばならない。これは一九四九(昭和24)年3月10日、彼が創刊した詩誌「木靴」(きぐつ)第一冊に発表されたものである。

## 東京行

近江卓爾に示す

金をこさえて東京へ行って来よう  
そう思って繩をなっている

行ってどうということもないが

昔住んでた大学町附近

過ぎ去つた青春について今さら悲歎にくれてもみたい思いがする

(われ等は<sup>註1</sup>や未来よりも過去の方が多くなつた)

けれどどうにかまとまりかけると汽車賃が倍になる

繩ない機械を踏む速度ではとても物価に<sup>註2</sup>追いつけない

私のこの足はすでに東京の土を踏んでいるかも知れない

ないあげた繩の長さは北海道にも達するだろう

冬ざれの野原の見わたせる仕事場へ

わが子はふところ手でかえってきて

けさは池に厚い氷が張つたという

霜に濡れたピナソラの実を縁側にならべ

クリスマスのお菓子をこさえようという

註1 定本は(われ等ははや…)としているが、初掲の「木靴」創刊号によって正した。副助詞は、を、わ、ぬ、文語口調を意識的に愛用したのである。



——(とをもってた)

——あその窓あいてた？

——(あいてた)

——あのひと本を読んてた？

——(読んてた)

私たちは今ここを流れています。日の暮れがたの細長い町なかです。岸で誰かが話しています。速くで指人形のようにゆっくり動くのはクレエンです。葦や真狐がそろそろ投げかけていた影を一本ずつしまいこむ頃です。両側の窓々のあかりが、すこしよごれたハシカチーフのように、四隅の傷んだカルタのようにちらちらしています。

麦の芽の一二寸

蟻の道もまだ短かい

水車小屋では穀物が

すこしずつ

ためらいながら

皮を脱ぐ

水車を押している

雪解の水は

遠い谷間から

出てきたばかりだ

そうです。そんなふうな谷間から私たちは出てきたのです。小さ

な土橋があって、老人が咳をするように水車がまわっていて。そこでいろんを新しい仲間と一しょになつたわけです。ずっと速い雪の中からきた仲間。兎や狸や狐の足跡の匂いをもつた仲間。固い太い幹のおもてを勢いよく、そうして裏毛のシャツのような葉っぱをまろび下りてくる仲間。つめたいよ。よせよ。そっちへ行けよ。くすぐったいよ。そのうち私たちはみんな一しょになつてしぶきをあげながら水車を歌いまわしはじめました。あふれる仲間であたたかいような、ひんやりしたような気持です。

私は思い出します。もとのすみかのあの暗い原生林を。枝々が区切りとつた小さな青空の重さを。夜々、その間にともる星たちを。その星のように、涙はあふれながれるためではなく、いつも内側に凍るためにあつたことを。私自身がその涙でもあつたことを。

——つくしよ さよなら

——茅花よ さよなら

——紋白蝶よ さよなら

——赤い沢蟹よ さよなら

——松の木の瘤よ さよなら

——先生の大きな疣よ さよなら

そこは山の中の分教場の卒業式です。裏側の窓の下をぼんやりと私たちは流れていました。中から生徒たちの合唱がきこえています。やがて一人一人が、忍術の巻物のように卒業証書を手にもるめて出てくるでしょう。帰って行くかれらのめいめい足音が、学校靴の中

の筆筒の音のようにしばらくはかれらを追っかけるでしょう。

註<sup>1</sup>  
まっすぐに顔を上げて

歌を唱うこともたち

窓の外に立っている一本の樹木のように

僕は僕の枝と葉を揺すってあげよう

大きく眼をひらいて

歌を唱うこともたち

僕はピアノに向かう一本の指と二本の足ののように

落ちついて焦りながら今

その大切な部分を一しよに押さえていてあげよう

歌を唱うこともたち

美しい美しいものたち

花瓶の花にかくれている一びきの蛇のように

僕は早くここから飛び去ろう

その短かい最後のひとふしの終らないうちに

そう、私たちは窓の外のニセアカシヤを見上げながら、蛇よりも

もっと早くそこを通り過ぎた<sup>ママ</sup>です。

ここにも水車がまわっています。網と魚杖をもったこともが立っています。遠くの空の小さい白い雲は、網の中へすっぽりはいるくらいです。露の広葉に野茨の花が散り溜っています。水車の水しぶ

きに、水しぶきの起こす風に、その露の葉はまるで大切なものをあずかっているふりです。搗きあがる穀物の匂いがあふれていて、なんと美しい日のひかり。あの水車小屋の壁の破れ目から、蜜を吸う昆虫の管のように仄暗い内部に深くさしこんでいる日のひかり。

—— もっと遠くへ行きたい

—— もっと大きく歌いたい

—— あめんぼりやみずすましがうるさい

—— 私たちを壊きとめるものないところへ行きたい

私たちは橋の下を通るのが最も好きです。今も出水のあとを見せ、橋桁のあらわな、美しい惨酷の下を息を詰めて通るのが好きです。石の橋。コンクリートの橋。片っぽうから両手をのべて、しゃんと背骨を張って、向う岸をつかまえている橋。あの橋の支えているのは、過ぎさる人間や車馬でしょうか。それとも橋裏に溜息のよりにとまっている草蜚でしょうか。

註<sup>2</sup>  
港の町から

女の鯖売りがくる頃である

ことしもその一人がやってきた

一びきをもらって露の葉にくるんだまま

しばらく縁側で世間話をした

鯖売りのひとも

早く亡くなった私の父のことを記憶していた

父はよくこうして縁側に坐つて  
字の見えなくなる時刻まで  
私のために絵本を読んだ  
点燈夫が街のガス燈をつけてあるく  
古い西洋の物語であつた

永い日も暮れかけた

私の村では

いつも点燈夫のかわりに夕風が

見えない手で

家々のあかりをつけてあるく

さて私は

井戸ばたへ出てなまぐさい手を洗つた

見はるかす熟れ麦の中から

鯖の眼よりも赤い大きな月が

あがつてきた

白い着物をきた誰かが、前こごみになってそのなまぐさい手を洗  
っています。ひるまのさえずりをこもらせた木が黒くしんとして立  
っています。

—— 海へ還るんだろかね。

—— 行くと行ったほうがよさそうだね。

—— 終いに私たちは魚になるだろかね。

(追われる魚のように早くきたから)

—— 私たちは貝になるだろかね。

(貝のようにゆっくりきたから)

—— 暗いなあ。

—— 暗いなあ。

ヘルマン・ヘッセが歌つた

誰もがながく保ちえないものを

(みずみずしい樹木のみどり

森の郭公

山のはにかかる満月)

けれどもそれらはずいぶん失われることがない

葉脈のようにそれらは

深く沈み待ち成熟する

光の鞭のもとで

厳酷の夏よ

麦のように稲のように

私を刈り取るものは誰?

私を植えて育てるものは誰?

太陽とそれから

あの閉ざされることのない大きな眼のために

絶えず白い雲たちを押しつけているものは?

私たちは今ここを流れています。ここです。日のとっぷり暮れた

細長い町なかです。両側の石垣が白く剥き出した歯のようです。あ、すっかりくたびれてしまった。それに窓々からこぼれるあかりで、こんなによごれているのがわかります。みどりの森や、郭公や、山のはの満月や、谷川の水車や、野茨や卯の花や、それに今さっきまで白い腹をすりつけていた燕たちはどうしたろう？海まではまだどれくらいあるのだろう？ さよなら。さよなら。何という花か、石垣の横腹に咲いているやつが花粉をこぼしてくれています。

——あの昔の歌をおぼえてる？

——(忘れた)

——あそこで白く歌ってるのは誰？

——(工場の廃水だよ)

註1 以下三節一四行は「歌唱」と題して、詩誌「木靴」

第二三冊（昭和35年11月20日発行）に掲載。

註2 以下四節二二行の原形は「赤い月」と題して、「木靴」

第四冊（昭和28年8月20日発行）に掲載。

今にして思うのだが、木下夕爾に「ながれの歌」の作があることは偶然ではない。私事で恐縮だが、わたしは「木靴」第一五冊に、「海に入るもの」という題で川のことを書いた時、同人の批評会で木下さんは格別の関心を示された。批評会が終って駅へ出る道すがらもずっとそれが続いた。昭和33年のはじめのことである。詳しくは思い出せないが、川の詩の話題の中で、わたしが北原白秋の詩集

「海豹と雲」にある「水上は思ふべきかな」の繰り返しが多い「水上」という題の詩を口にすると、木下さんももちろんあの詩を知っていて、「水上は思ふべきかな」と唱和して懐しまれた。それから、井伏氏の「川」も当然のことながら話題にのぼった。あの小説の中に谷川の渦を克明に観察されてあるのを二人して嘆賞したことであった。

駅で別れたその翌朝すぐ配達されてきた速達のハガキに、拙作「海に入るもの」についての、さらに具体的な親切なアドバイスが書かれて来た。前日のアドバイス以上に、「あの一行は、こう変えてはいかが」と言う詩句の批評にまで及んでいた。あとにもさきにもただいちこのことである。

木下さんの生前の最後の詩集「笛を吹くひと」が出た直後のことで、的場書房の北川幸比古というひととは会ったことはないのですが信用のおけるひとですから西原さんが詩集を出されるなら紹介してあげましょう、というようなことで話が具体化して、わたしの詩集原稿はすでに東京へ送ってあったのだが、木下さんの親切にほだされて、その一行を批正通りに改めるように速達で言っちゃったので、辛うじて間にあって、わたしの詩集の「海に入るもの」があのような作になった。

木下さんがいかに「詩」を愛し、ひとの詩業をも大切にされたかに、わたしが敬服する語りぐさのひとつとしてここに書くのだが、さらにこれは、木下夕爾の、川の詩に対する熱心の深さをわたしに感じさせた。

今は福山市の北端に当る御幸町上岩成（みゆきちやう・かみいわなり）の夕爾生家のすぐ前に、加茂川の橋がある。橋の手すりに木

下さんとわたしとふたり腰をかけた写真がある。あの写真は、忘れもしないわたし尾道市立長江中学校の校長をしていたじぶん、その校歌の歌詞を作って貰う依頼のために、その当時長江中学の国語科主任であった山口信一君といっしょに夕爾の薬局を訪れた時、山口君のシャッターで撮影されたものである。去年、一九六六年八月七日、生家のそばに「家々や菜の花いろの燈をともし」の句碑が出来た、その除幕式の朝配られた毎日新聞の備後版にわたしが書いた「木下夕爾・その人と作品」と題する一文に添えて、あの写真が掲載されたのは暗れがましくて面映ゆい限りだったが、「川」に沿う木下夕爾の風貌が、わたしの目から消えない。あの川でわたしも夕爾といっしょに釣りをしたことがあった。彼が井伏鱒二に手ほどきされて釣りの味をおぼえた前述の四川は、夕爾生家の約一〇キロ川かみにある加茂川の支流である。井伏鱒二の生家は、そのもうひとつ川かみの、念永寺橋からはいって行く谷にある。

夕爾のメルヘン「ながれの歌」も、鱒二の小説「川」も、やがて芦田川となって、広島県福山市の国鉄福山駅の西方の鉄橋の下を潜って瀬戸内海にはいる。

わたしに与えられたスペースに限りがあるので、夕爾の筆になる散文の資料として「ひらくときなく」を紹介しておきたい。

夕爾とわたしの間で、白秋が話題になったのは、さきに書いた「水上は思ふべきかな」のただいちど限りだったと思う。ところが、生田春月の名はたびたび口に出た。散文「ひらくときなく」は春月のことである。

## ひらくときなく

### ——生田春月の死——

生田春月（いくた・しゅんげつ）は二十年前、五月の瀬戸内海に身を投げて死んだ。毎年この季節になると思い出すべきことのひとつである。恋愛のためともいい、思想上の悩みからも伝えられた。わたしはまだ訪ねてもみないが小豆島にその記念の詩碑が建っている。

時と場所を選んだ、詩人らしい死である。ポオル・フォオルの「空は陽気だ、時は楽しい五月だ」の詩句を借りれば、「とても美しい死に方だ。海へはまって失せたとはいとも言えよう。ポオル・フォオルの詩は光り輝く五月の真昼の海が背景で、たまたま起ったこどもの溺死事件さえもあたりのまばゆい風光に同化されてしまうという、いかにも陽気な楽天的な詩であるが、反対に春月の場合にはさびしい静かな月夜の海である。

由来、春月の詩は感傷過多の故をもって不当にかえりみられないようである。じつはわたし自身もとりわけ好きだというわけではない。人妻との恋愛をうたった詩が白秋にも春月にもあるが、前者がからりとして反して、後者は重苦しく粘液質のかんじがする。いつか春月の生まれた山陰の冬空をみて、わたしはこのことを味わった。けれどもわたしは毎年五月になると春月の死をおもい、その詩集をひもとくのである。

春月の最後の作と伝えられる詩は、「ひそかに愛でし君なれば、ひそかに君をおもうのみ」にはじまり、「こころの底に秘

めたりし、君が名こそは尊とけれ、ひらくときなく閉づる眼の、なかにぞ君を率てゆかむ」で終わっている。わたしはこの詩を春月の絶唱だと思っている。ことに終わりの四行には、感傷もそのまま月光のように凝固したかの観がある。おそらく春月はこの詩を書き終わって、月明の船のデッキから身を投じたのであろう。わたしは海に向ってひるがえる詩人のすがたをおもい、ひらくときなく閉じられるその眼、その眼の中に刻まれたものかたちをおもうのである。何というさびしさ、何という幸福であろう。この出来ごと自体が春月の身をもって書いた詩だという気もする。

「歌う高く世にのこし、むくろは水にゆだねつつ……」と佐藤春夫の春月を弔った「流水歌」にあるが、いろいろ取沙汰された遺骸のゆくえについてはわたしはつまびらかにしない。春月がそれをこいねがったようについに発見されなかったと考えた方がふさわしい。

毎年五月になるとわたしは海をおもい、春月の死をおもうのである。死が美しい誘惑である時にことにそうである。けれども讚美する気持ちは毛頭ない。わたしは俗物であるから敗北よりは少々醜くても勝利の方がいい。美しい敗北は勝利に似てはいても勝利そのものにはならない。ただわたしたちの眼もいつかは閉じられる。「ひらくときなく閉づる眼」の中、(それは何であつてもいいが)安らかに率てゆけるものを欲しいとおもうだけである。

この一文は一九五一(昭和26)年7月15日、広島県松永高等学校

文芸部が発行した「おもひぐさ」(「遺芳文芸」改題)第五号に載せられたものである。柏原武蔵君の好意によって借覧手写することが出来た。木下夕爾の「作品」のうちの一篇として重要と思われるのでここに挙げておく。

瀬戸内海に消えた詩人を追慕した全文を録して、第一章 GENIUS LOCI を終わる。

#### 付記

読売文学賞受賞の「定本・木下夕爾詩集」は、一、〇〇〇部限定出版で番号入り。一九六六(昭和41)年11月20日、牧羊社(東京都港区芝白金三光町三五・一・一)・振替東京九〇二〇二二)の発行である。

(定価 一、三〇〇円・送料九〇円)

ここは広告欄でないことは心得ているが、新聞広告などせぬ出版なので特別にお許しを乞いたい。

この稿しめきり期日までに、わたしは年譜を作ること約したが、そのせめをはたせなかったので、角川文庫の「現代詩人全集」第八巻・現代IVの一八四ページに掲載のものを付記して置く。

木下夕爾 大正三年(一九一四)広島県に生まる。七歳で父を失い、広島県立(旧制)府中中学を経て第一早高中退、名古屋薬専卒。「文芸汎論」その他に作品を発表、「四季」派の影響を受けた。第一詩集「田舎の食卓」(昭和一四年刊)は第六回文芸汎論詩集賞をうけた。次いで「生れた家」(昭和一五年刊)、「昔の歌」(昭和二一年刊)、「晩夏」(昭和二四年刊)、「児童詩集」(昭和三一年刊)、「笛を吹くひと」(昭和三三年刊)を出版。昭和一三年以来、義父の業をついで生地に住居。日本詩人夕

ラブ、日本現代詩人会、詩誌「木靴」「地球」などに所属。  
追補 昭和四〇（一九六五）年八月四日、横行結腸ガンで死去  
（五〇歳）。なお、句集に、「遠雷」（昭和三四年刊）がある。  
死後、昭和四一年に、「定本・木下夕爾句集」、「定本・木下夕  
爾詩集」があいついで刊行され、「定本・木下夕爾詩集」は、  
四二年、読売文学賞を受賞した。